

都市在住閉経期女性における転倒と関連要因

○小坂谷典子 塚原典子 江澤郁子

(日本女大 食物)

《目的》転倒は、寝たきりの原因となる骨折の主要因の1つといわれ、その予防の重要性が注目されている。高齢者における転倒の状況についての報告は種々なされているが、閉経期においては明らかでない。本研究では45-65歳の都市在住女性における骨量および生活習慣の調査から2年間のprospective studyを行い、転倒の状況とその関連要因を明らかにすることを目的とした。

《方法》1996年に東京都文京区の保健所にて骨密度の測定を含む各種調査を実施した45,50,55,60,65歳の女性に対し、2年後に転倒に関するアンケート調査を実施し、回答の得られた265名を対象とした。なお、骨代謝に影響をおよぼす疾患および手術の既往を有する者等は除外した。1996年の調査ではDXA法による腰椎第2-4骨密度、SXA法による踵骨骨密度、身長・体重・体脂肪、握力の測定、日常生活アンケート調査、留置法による3日間の食事記録調査を実施した。2年後の1998年度には郵送による2年間の転倒・骨折・日常生活上の留意点等に関するアンケート調査を実施した。

《結果》対象者265名中、転倒経験者は61名(23.0%)であった。転倒率は各年代で差は見られなかった。転倒時の状況として屋外、歩行中、階段等昇降時、滑った、つまずき、段差あり等があげられた。2年間に骨折した者11名のうち、転倒による骨折者は9名(3.4%)で、骨折部位は腕、ｸﾞﾗﾝｼﾞ等であった。転倒の関連要因には骨折の既往有り、骨量が低い、握力が低い、体格ではBMIが高値であること等が示唆された。